横芝の碑（その四十三）

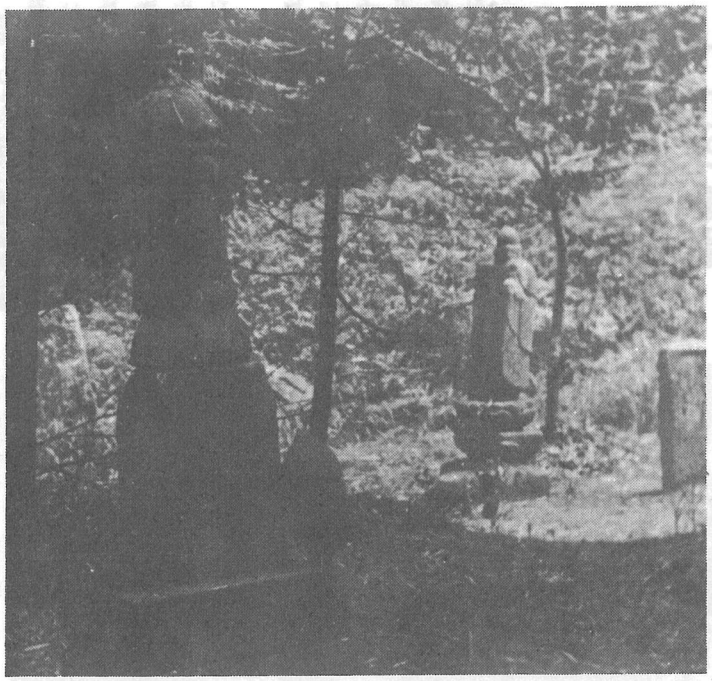
里人は語る

―〈坂田城主井田氏の墓と〉―

坂田湖畔を通って小堤方面に向い、水資源開発公団の前を通りすぎると間もなく左手に石の鳥居が見えます。参道を真直ぐに進みますと、正面は急勾配の石段で神社の境内に入り、後は坂田城跡の丘陵になっています。

石段の昇り口附近は、うっ蒼とした針葉樹や常緑で囲まれていて思わず肌寒さを覚える位ですが、そのすぐ右手の一角は、ぽっかりと明るくなっていて、苔むした石塔や石像等が、何となく自然に集って来た仲間達、といった様な姿で立ち並んでいます。その中で、何か物申し度気に立っている地蔵様の丁度正面の辺りに目を移しますと、杉と檜の若木の林に囲まれて一基の由緒あり気な石塔に気が付きます。五輪塔か何かの一部の様にも見えますし、塔婆の様にも見えます。里の人々はこの塔を、「坂田城主井田様のお墓だろう」と言い伝えております。

昔、大台の城から、この坂田城に本拠を移して城主となった井田氏は、ここに移ると共に、地元の光台寺を菩提寺としました。寺はよく栄え、一時は寺有地が一町歩に及ぶ広汎なものであったということですから、里の人々の語り伝えは相当真愚性に富んでいると思います。光台寺という寺については、いま建物こそありませんが、寺籍はちゃんと残っていて、すぐ近くの萩原安一さんという方が寺総代格で、光台寺の具物等を仕守りしておられ、光台寺が曹洞宗なので、曹洞宗々務庁に、寺格賦課金等、約三万円を毎年納付しておられるそうです。また安一さんが管理しておられる光台寺具物の中に、上総国武射郡坂田城主井田因幡守、永録八年三月九日没、哉いは、為二親菩提光堂寺三尊再奥放主和多善大〇権介、等と黒書された位牌等も残っています。

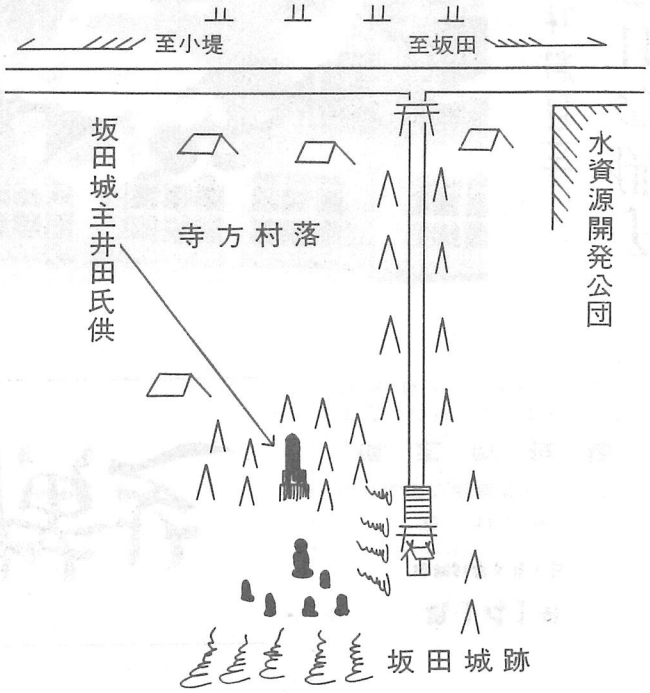


○写真はその石塔で、一番下の台座の隅に載っているのは多分欠け落ちた頭頂部のものだと思います。

向うに見える地蔵様とは、丁度向い合った形になっています。明るく見える草原の後は神社の建っている丘と坂田城の峻崖が続いています。石塔には、何故か文字らしいものが刻まれていませんので里人も、何代目の城主、ということについては「さあそれは分りません」と答えるだけですが、碑文のないこの石塔には、返って何か由緒めいたものを感じるのでした。

辺りに人影もない、この真空地帯の様な針葉樹の林に囲まれた石塔の傍に立って、そそり立つ様な坂田城の峻崖を見つめていますと向い合って建っている地蔵様や、墓石の一つ一つが、遠い昔の鎧武者の様な錯覚に落入り、夏草や、兵士供が夢の跡、の句を口ずさんでいる自分に気がつきました。そして、すぐ先程、無理にお願いして萩原安一さんに見せて戴いた、曹洞宗々務庁の賦課金請求書が、役場の納税告知書に類似していたこと等を考え、時の流れを、つくづく感じるのでした。

（町文化財審議会委員小沢春光）



おわび

横芝の碑その四十二の文中、五木田明は廣、祖父慶次郎は桂次郎、若梅原次は原次の誤りでしたので訂正しておわびいたします。